



北朝鮮人権侵害問題啓発週間
作文コンクール

2024

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！



北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール 2024

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて!

北朝鮮による拉致問題は、単なる誘拐事件であるにとどまらず、その本質は国家主権の侵害です。拉致被害者やその御家族が御高齢となる中で、時間的制約のある拉致問題は、ひとときもゆるがせにできない人道問題です。日本政府は、全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、政府一体となって、総力を挙げて取り組んでおります。

拉致問題の解決のためには、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意思を示していくことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題に触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっております。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品や舞台劇の視聴、拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知ってもらい、拉致被害者やその御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何ができるのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2024を実施いたしました。

本作文コンクールでは、全国から応募のあった三二五二一作品の中から、厳正なる審査の結果、最優秀賞及び優秀賞並びに特別賞を選定するとともに、本作文コンクールに積極的に参加している学校を団体賞として選定いたしました。

最優秀賞及び優秀賞の入賞者には横田めぐみさんの拉致現場を視察いただき、令和六年十二月十四日に行われた表彰式では最優秀賞入賞者から視察時の感想を発表していただきました。

この度、入賞作品を文集にしましたので、是非、御一読いただけますと幸いです。

令和七年二月

政府拉致問題対策本部

作品総数

全 3,251 作品

最終審査委員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会
横田 拓也 代表

株式会社毎日新聞社
猪狩 淳一 ソーシャルアクションラボ編集長

ニューヨーク大学
ロバート・ボイントン 教授

神戸大学
ルックス・ジョン・マシュー 准教授

中部大学
キング・グレゴリー 教授

法務省
隄 良行 大臣官房審議官

外務省
大河内 昭博 アジア大洋州局審議官

文部科学省
森 孝之 大臣官房学習基盤審議官

内閣官房拉致問題対策本部事務局
平井 康夫 内閣審議官

※記載の役職は審査当時のもの



表彰式の様子(2024年12月14日、東京都千代田区イイノホール)

目次

団体賞

中学生部門

| | | | | |
|------|--------------------|-------|-----------------|----|
| 最優秀賞 | その手を掴むまで | 小原逢瑠 | 倉敷市立東中学校三年 | 8 |
| 優秀賞 | 声を上げる自由 | 潮奏寧 | 広島県立広島中学校三年 | 9 |
| 優秀賞 | 拉致の黒で曇ってしまった幸せ色の大空 | 田村源太郎 | 志布志市立伊崎田中学校三年 | 10 |
| 特別賞 | 自分にできることを | 谷川晶 | 熊本県立宇土中学校三年 | 11 |
| 特別賞 | 痛みを心に刻んで | 小野原和子 | 佐賀大学教育学部附属中学校二年 | 12 |
| 特別賞 | 実際にあった拉致被害 | 江崎理人 | 昭和薬科大学附属中学校三年 | 13 |

高校生部門

| | | | | |
|------|------------------|-------|------------------|----|
| 最優秀賞 | 風化させないために僕ができること | 福留豪希 | 鹿児島県立甲南高等学校一年 | 16 |
| 優秀賞 | 「ただいま。」を聞くその日まで | 羽島奈穂 | 鹿児島県立川内高等学校一年 | 17 |
| 優秀賞 | 一緒に考え続けること | 珠久玲於奈 | 清風南海中学校・高等学校一年 | 18 |
| 特別賞 | 拉致被害者の声を忘れないために | 川合咲綺 | 成立学園高等学校二年 | 19 |
| 特別賞 | 知ること、知らせること | 西尾俐々圭 | セントヨゼフ女子学園高等学校一年 | 20 |
| 特別賞 | 『北朝鮮拉致問題解決に向けて』 | 生徒 | 玉川聖学院三年 | 21 |

英語エッセイ部門

| | | | | | |
|-------|------|---|------|--------------|----|
| 中学生部門 | 最優秀賞 | Abduction is a global issue | 高田昌和 | 舞鶴市立加佐中学校三年 | 24 |
| 中学生部門 | 優秀賞 | A first step to solve the abduction issue | 顧梓訳 | 板野町板野中学校二年 | 26 |
| 高校生部門 | 最優秀賞 | Passing The Baton | 守江咲良 | 愛媛県立西条高等学校二年 | 28 |
| 高校生部門 | 優秀賞 | Silent Victims | 浏脇詩 | 鹿児島情報高等学校二年 | 30 |

団体賞

本文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を設けております。
今年度、団体賞を受賞されました学校は左記のとおりです。

調布市立神代中学校

立川市立立川第七中学校

行橋市立立泉中学校

行橋市立行橋中学校

兵庫県立姫路南高等学校

セントヨゼフ女子学園高等学校

大阪府立富田林高等学校

島根県立出雲商業高等学校

中学生部門

最優秀賞

その手を掴むまで

倉敷市立東中学校 三年

こはら あえる
小原 逢瑠

「いつてきます」と学校へ行き、部活動を終え「ただいま」と家に帰り、家族と温かい晩ご飯を食べ、寝る。これが私の当たり前の日常、そして北朝鮮によってあっさりと自由を奪われた横田めぐみさんの日常でもあった。

めぐみさんは拉致され、北朝鮮に向かう船の中で、泣き叫びながら壁を引掻いたため、到着の時には両手の爪が剥がれ、指が血の赤に染まっていたそうだ。この話だけでも私は出来事の残酷さやめぐみさんの悲痛な叫びを感じたのだが、北朝鮮での辛い日々を想像するとさらに心臓を締めつけられるような息苦しさまで覚えた。めぐみさんのように拉致されたのは日本人だけでも十七名以上いる。もし私が当事者なら、今すぐにも日本へ帰りたい。被害者の方々は手を精一杯伸ばして助けを持つているはずだ。しかし、四十年以上経った今でもその手を掴むことはできず、被害者の方々は日本への帰還を果たせていない。

今夏、私は『拉致問題に関する中学生サミット』に県代表として出席し、めぐみさんのご兄弟の横田拓也さんの話を聴いた。被害者自身の辛さや苦しみはもちろんとても大きいけれど、それ以上に被害者のご家族の不安や焦りも大きい。「もう一度会いたい」その思いが放たれた矢のように真っ直ぐに私に突き刺さった。その思いに共鳴し、私は「拉致被害者の方々を絶対に取り戻す」と決意した。

入賞者のコメント

拉致問題を知り、自分事として考える。そのたった一つの行動が積み重なり、拉致被害者の救出につながる。その手を掴むまで、決して諦めてはいけない。

サミットに参加した人数や政府の方の人数は日本人口と比べるとほんの握りでしかない。拉致問題という、とてつもなく重たい問題を一部の人間だけで解決するには限界がある。だからこそ拉致問題を解決するためには国民一人ひとりが拉致問題について知り、「被害者を取り戻す」という気持ちを高めなければならない。解決への意識をもつ人が多いほど、問題解決への力強い後押しとなる。しかし、現実には拉致問題を知る人は少なく、知っていたとしても言葉だけ、という人が多い。だから拉致問題を知り被害者の帰還を強く願うようになった私が、率先して拉致問題の現状を広く伝えなければならない。私の被害者奪還の決意のきっかけとなったこのサミットのように、私の作文を多くの人に読んでもらうことが拉致問題を知るきっかけとなるはずだ。めぐみさんが拉致された新潟県では拉致問題の啓発活動が学校でよく行われていると聞く。しかし、私は拉致問題について学校で学んだ記憶がないに等しい。日本全体に関わる問題の取り組みに差があってはならない。拉致問題は人の自由を理不尽に奪う人権侵害でもある。いかに自分事として考えられるようにするか。まずは人権週間に拉致問題を取り入れることを学校に提案したい。

今も被害者の方々は自由を奪われながらも助けを求め、手を懸命に伸ばしている。私達はその手を掴まなければならない。

優秀賞

声を上げる自由

広島県立広島中学校 三年

うしお
かなね
潮奏寧

「一番悪いのは北朝鮮。でも、自由の国日本にいるのに行動に移さないのも罪深いことなのではないか。」

八月九日、県代表として拉致問題に関する中学生サミットに参加した。冒頭の文は、拉致被害者ご家族による講話の中で、最も私の心に突き刺さった言葉である。

サミットへの参加が決まって以来、アニメ『めぐみ』を見たり、パンフレットを読んだりするようになった。拉致被害者ご家族の著書も読んだ。これまでの私は、拉致問題について無知で、過去の出来事という印象しか持っていなかった。自分には関係ないと無関心だったのだ。しかしそれは間違っている。調べていくうちに、北朝鮮による拉致の可能性がある行方不明者が八百人以上いること、現在帰国できた人は五人のみであることが分かった。その他の方々は今なお北朝鮮によって拉致されている可能性があり、ご家族の苦しみも続いている。拉致問題は現在進行形の問題なのだ。また、アニメ『めぐみ』で取り上げられている横田めぐみさんが拉致された年齢は十三歳。十五歳である私よりも幼い時に拉致された。当時のめぐみさんの恐怖や絶望を思うと、過去の話だ、他人事だと無関心だった過去の自分をとても恥ずかしく思う。

拉致問題に興味を持つようになった私は、友達に話を振ってみたことがある。「近頃、北朝鮮拉致問題に興味あって、結構調べているんだよね。」というと、友達は「すごい！難しそうで私には無理。」

入賞者のコメント

拉致問題は、緊急を要する非常に深刻な問題です。拉致問題を風化させないために自分に何ができるのか。考え行動する必要があると思います。

と苦笑していた。以前の私もこういうに違いない。しかし、今はこの言葉に違和感を覚える。確かに、拉致問題は非常にデリケートで難しい問題である。しかし、難しいから知ろうとしない、行動に移さないのは間違っているのではないだろうか。

被害者ご家族によると、拉致被害者の親でご存命の方はとても少なくなっているらしい。それほど長い年月が経ったということなのだ。一刻でも早く問題を解決しなければならぬ。問題解決のために私にできることは何か。それは、今回の学びをより多くの人に伝えることだと思う。

サミットに参加しなければ、私は拉致問題について無関心のまま何気ない日々を過ごしていただろう。私たちが過ごしている何気ない日常は、拉致被害者とそのご家族が理不尽に奪われた当たり前の幸せなのだ。

「自由の国日本で行動しないことは罪深い。」
私たちは、声を上げられる自由を持っている。それはかつて、そして今なお拉致被害者たちが奪われている自由。だから私は、声を大にして伝えていきたい。拉致とは何なのか。今もなお戦い続けている政府と被害者ご家族について。拉致問題を風化させてはいけない、許してはいけないということ。

優秀賞

拉致の黒で曇ってしまった
幸せ色の大空

志布志市立伊崎田中学校 三年

たむら

田村 源太郎

げんたろう

この作文のタイトルは、僕が「拉致問題に関する中学生サミット」で北朝鮮による拉致問題を多くの人に知ってもらうためのCM劇を制作した際に、僕たちのグループで考えたキャッチコピーだ。僕たちは普段、日本という恵まれた民主主義国家の中で何不自由なく、毎日当たり前のように平和に暮らしている。そんな何気ない日常の澄み渡ったきれいな幸せ色の大空に、ある日突然、北朝鮮による拉致という黒い雲がかかってしまった。そんな「黒い拉致雲」が一日も早く晴れてほしい。拉致被害者の方々がみな帰国を果たし、また家族と再会して幸せ色の大空のもとで平穏な暮らしを取り戻してほしい。そんな願いを込めた。

僕は「幸せ色の大空」になぞって、サミットへ参加するために鹿児島から東京へ移動する飛行機の中で体験したことをふと思い出した。あいにくの曇り空で気流が安定せず、僕たちを乗せた飛行機は雲を突き抜けるときには生きた心地がしないほど激しく揺れたが、いざ厚い雲を越えてみるとそこには驚くほど美しくきれいな青空が広がっていた。地上から見たら雲に覆われていた空も、その雲の上ではしっかりと晴れていたのだ。そこに僕は、これは不謹慎だと言われてしまうかもしれないが、祈りの気持ちを込めて拉致された方々の人生を重ねてみたいと思った。例えば拉致被害者のひとり、横田めぐみさん。当時十三歳という僕と近い年齢で北朝鮮に拉致され

てから四十七年、いまだに最愛の日本の家族と再会を果たすことができていない状況だが、歳月を経る中で僕には到底想像もできないくらいの厚い雲、つまり絶望や恐怖、苦難を味わったであろうめぐみさんにも、北朝鮮で大切な新しい家族ができキム・ヘギョンさんという娘さんも生まれた。もしかすると、北朝鮮でささやかな幸せを掴んでめぐみさんなりの美しくきれいな青空を見ているかもしれない。いや、せめてそうあってほしいと願いたい。

ある日突然、北朝鮮に拉致された家族と再会できないまま何十年もの時が経ってしまったている拉致被害者の方々がいること。そして北朝鮮に大切な家族を奪われ、家族の帰りを待ち続けている拉致被害者の家族の方々がいるということ。この現実と史実を、僕たちは決して忘れてはいけない。拉致は重大な人権侵害であり、断じて許してはならないことだ。この問題の一日も早い解決に向けて、微力な僕に何ができるだろうか。それはこの問題を風化させないために、まずは僕自身がこの問題に関心を持ち続け、そして周りの人たちにも関心を持ってもらえるように働きかけること。そして拉致被害者やその家族の方々の心の平穏と問題解決に向けて一日も早く事態が動き出すことを、祈り願い続けることだろう。

入賞者のコメント

雲はずっと空を覆っているわけではなく、必ず晴れる時が来ます。どんなに分厚い「拉致」という雲も、いつかきつと晴れる日が来ることを願ひ続けます。

特別賞

自分にできることを

熊本県立宇土中学校 三年

谷川 晶
たにがわ ひかり

私が北朝鮮拉致問題について知ったのは、小学五年生のときだ。当時は「そんなことがあったんだな」としか思うことができなかったが、中学三年生になった今、こうして北朝鮮拉致問題について知る機会がまたできた。そして、知っていくうちに北朝鮮拉致問題がどのようなものなのか分かっていった。どれほど恐ろしくて残酷なものなのか。みなさんは「石高健次」という人物についてご存知だろうか。私が石高健次さんについて知るきっかけをくれたのは父だった。北朝鮮拉致問題の事実が認められた経緯について疑問に思っていたところ「石高健次調べてみたらいいよ」と言われたことがきっかけだ。では石高健次さんほどのような人物なのだろう。

石高健次さんとは、日本のテレビプロデューサー。北朝鮮に帰国していた人々の多くが行方不明になっていることを取材、報道していた過程で、北朝鮮の秘密工作員が日本人を拉致していた事実を掴んだ人物である。中華料理店でコックをしていた原さんを拉致した北朝鮮のスパイの共犯者が仮釈放された際に取材をしたところで日本人を拉致していることを認めさせたのだ。

当時日本では、北朝鮮拉致問題に対してあまり関心が持たれておらず、調査が行き詰まっていた。だが、石高さんのおかげで拉致問題は解明に近づいたのだ。私はテレビプロデューサーという立場でありながら、自分にできる最大限のことに必死になって取り組み、

結果拉致問題を解明に近づけた石高さんの熱意がすごいと思った。そこで私も将来困っている人に寄り添い、誰かのために一生懸命自分にできることを取り組める人になりたい。お金やプレゼントなどを渡すことによって人を笑顔にすることは簡単だと思う。だが、その人にとつての幸せを渡して人を心から笑顔にするのは難しい。石高さんのように熱意をもって自分にできることを一生懸命取り組んでいくと、きっと心から笑顔になる人は増えると思う。だから私は自分にできることを一生懸命取り組んで心から笑顔になる人を増やしていきたい。

そして、北朝鮮拉致問題を多くの人に伝えていくことも大切だと思う。拉致問題で悲しんでいる人がたくさんいる中それを忘れてはいけない。拉致問題を解決しようと動いた人々と努力をムダにしたいけない。以前、私は北朝鮮拉致問題とどこか遠いもののように感じてしまい何もできなかった。自分にできることなどないのではないかと考えてしまっていたからだ。でも、こうして作文を書いたり、メディアに取りあげてもらったり拉致問題を伝えるためにできることはたくさんある。

北朝鮮拉致問題を多くの人に伝えるために、心から笑顔になる人を増やすために、私は今から自分にできることに取りくんでいきたい。

入賞者のコメント

拉致問題だけに関わらず、私たちが困っている人を助けるためにできることは沢山ある。自分に何ができるのかしっかりと考えて行動していきたい。

特別賞

痛みを心に刻んで

佐賀大学教育学部附属中学校二年

小野原 和子

おの はら わこ

私たちは他人の痛みに疎い。自分の痛みにはあんなに鋭敏なのに、なぜ、他の人のことになると、こども鈍いのか。

先日、機会がありおおよそ二十二年前の新聞を目にした。その新聞は号外だった。見出しは「24年ぶり家族と再会」。拉致問題についての記事だった。愕然とした。二十四年も家族に会えなかったなんて。そしてそれが今もなお、続いているなんて。私にできることは何だろう。私は何をしたらいいのだろう。

一例として、人間に備えられた機能「想像力」を使うのはどうだろう。相手の立場になって考えること。そんな子供っぽいこと、と思うかもしれない。でも、一度立ち止まって考えてほしい。もし、自分が二度と大切な人と会えなくなってしまうたら。もし、大切な人が二度と自分と会えなくなってしまうたら。それを考えたとき、私は胸が苦しくなった。のほほんと暮らしている私でさえそうなのだ。立場が変わると、心境も激しく変わってしまうだろう。自分たちが未来を変えなければならぬのはわかっている。感情の起伏のない言葉に重さはない。綺麗事はだれにだっていえる。だから私たちは痛みを経験する必要がある。あんなに苦しいことは二度と繰り返してはいけない。だからこそ、ある限りの想像力を絞って、当事者の方々の何百何千何万分の二くらいの痛みを心に覚えておくべきだ。

「自分のこととして」、とらえるのがポイントとなる。客観視した

入賞者のコメント

このコンテストに応募しようと思いついたのは、読売新聞社で二十年前の「号外」を目にしたとき。この気持ちがいかに多くの人に届けばいいかと強く思う。

第三者の意見もときには必要だろう。しかし、主観的に見ることで、また違う何かを発見できるのではないか。ストーブの熱さを教えるには実際にストーブに触れさせてみるのが一番効果的だ、なんていう例え話がある。それと同じようなことをするのだ。想像の中で傷ついて、恐怖本能に訴える。もし自分が、もし家族が、もし大切な人が。

ありとあらゆるパターンの想定をして導き出された答えこそが、きつと自分の答えなのだろう。感情的になることはあまりほめられたことではないけれど、でも必要なときもあるのだと思う。人間らしい人間の感情。自分のものの見方の視点を増やすことによって、当然ながら情報も増える。それはきつと、悪い方には転ばない。

私の考えはぼんやりとしていて、甘っちょろいお子様なものかもしれない。でも、あの新聞を見たときの衝撃や、自分の心に刻んだ痛みは、決して忘れることはないだろうし、忘れたくはない。拉致事件は、毎日をただ平坦に生きている私たちに無関係ではない。当たり前だが、拉致事件は過去の出来事ではない。過去の出来事にするために私は、私たちは一体、何ができるのだろうか。

特別賞

実際にあった拉致被害

昭和薬科大学附属中学校 三年

江崎 理人
えざき りひと

僕の家の近くには港がある。母は子供の頃祖母に、「二人で港に行ったらダメだよ。」と事あるごとに言われていたそうだ。その理由を聞いてみると、過去に北朝鮮が日本人を拉致していたからだっただけらしい。「昔、船で海を渡って来て人々を拉致していったらしいよ。いつ誰の身におきるかわからないから、一人では決して海に近づいたらダメだよ。」と話してくれた。

僕には拉致という言葉がピンとこなかった。普通に過ごしていたら聞かない言葉であり、身近で起こるはずがないと思っているからだ。友人の家が港のそばにあり、時々遊びに行っていた事もあり、恐いという認識には至らず、あまり気にも留めなかった。

中三になり、道徳の授業で「めぐみ」というアニメを観た。そのアニメで知ったのは、ごく普通の日常生活の中に、拉致が存在していたという事実であった。今から五十年前前に実際に日本で起きた出来事だった。拉致されるということは、自分の意志に関係なく日本から、家族から引き離され、行動の自由も無く、言葉の壁もあるだろうし、考えたらきりが無い程自由が存在せず、今の自分の生活からは想像すら出来ない事であった。その事に恐怖を感じたものの、身近に感じられない以上どこか他人事だととらえている自分がいると感じ、少しモヤモヤした。

現在、北朝鮮は、拉致問題は解決済みであると主張している

入賞者のコメント

家族がそこにいると知りながら、迎えに行くこともできない家族の苦しみは計り知れません。一刻も早く全員の帰国が叶うことを心から願っています。

ようだ。しかし、帰ってきたのは五名のみで、全員は帰って来ていない。全員が帰って来なければ、決して問題が解決したとは言えない。何故なら、引き裂かれた家族にとっては、決して小さな事とあきらめられるような問題ではないからだ。そのことを日本国民一人一人が自分の事のように考える事が大切だと思う。未だに解決していないのは、人々の関心が薄い事が一因ではないだろうか。被害者とその家族が高齢化し、時間が経ちすぎている今、自分一人では大きく何かを変える事など到底出来ないであろう。しかし、この問題に関心を持ち、その問題の解決に近づくために自分が出来るのかを考えることは出来るはずだ。僕は、時が過ぎるのと共に、この問題が未だに解決していないという事実などが忘れられる可能性があると思う。そのため、この問題に人々が関心を持つように、歴史の教科書や公民の教科書に載せるなどの工夫を考え、実行することが大事だと思った。しかし、これは一人では難しいだろう。だから、これからもこの北朝鮮拉致問題の作文などを通して、沢山の人のこの問題の事実を知ってもらい、関心を持ってもらう事が重要だと思う。

高校生部門

最優秀賞

風化させないために僕ができること

鹿児島県立甲南高等学校 一年

福留 豪希
ふくどめ こうき

僕は二〇〇八年八月十二日に生まれた。その年より三十年前の八月十二日、日置市吹上浜で二組の男女が北朝鮮に拉致される事件が起きた。いわゆる日本人拉致事件の一つだ。

僕が拉致問題について知るきっかけとなったのは、平壤放送という北朝鮮のラジオ放送を偶然聞いたことだ。聞き慣れない言葉に興味を沸き、北朝鮮について調べていくなかで拉致問題を知った。さらに被害者家族が身近に存在することも知った。日々穏やかに過ごしていた家族が突然奪われる悲しみや苦しみはどれほどのものか。そして、家族を奪われたまま四十六年の月日が流れ、被害者家族以外の人々は事件があったことを忘れ、若い世代は知ることさえもなく、拉致事件は風化してゆく。

「風化」に対して、自分でも何か出来ることはないか。僕は、二〇二三年夏、拉致被害者家族である市川健一さん龍子さんご夫妻に直接話をうかがうことにした。訪れた市川さん宅には願いの込められた「カエル」の人形やぬいぐるみなどがたくさん置かれていた。

一九七八年八月十二日、健一さんの弟修一さんは交際していた増元るみ子さんと一緒に吹上浜に夕日を見に行った後、行方が分からなくなった。十五年を経た一九九三年、北朝鮮に拉致されたという事実が明らかになる。それまでの十五年間、家では修一さんの話題は避けられていた。思い出すと悲しく辛い思いを両親がするからだ。「どうでもいい。元気でいてくれたら」修一さんの無事を願う

母親トミさんの言葉だ。しかし、トミさんも父親の平さんも修一さんとの再会を果たせないうまま亡くなった。今、健一さんご夫妻は、自分たちが存命のうちに修一さんとの再会を果たしたいと強く願っている。進展が見られない現状への焦りや歯がゆさ、なによりも拉致問題が風化してしまうことへの不安を抱えながら、日々の生活を営みながら、講演活動や署名活動を様々な場で続けている。

この真実を多くの人に知ってもらうことが風化させないために大切だと考えた僕は、中学校の課題研究で拉致問題についてポスター発表をした。しかし、周囲の反応はとても薄かった。このままではいけない。僕は、市川さんご夫妻に直接お話ししてもらおうのが一番だと思い、中学校で講演をしていただいた。みんな真剣に話を聞き、涙を流す人さえいた。それほど心に響く被害者家族の言葉だった。

僕にとって八月十二日は誕生日だからおめでとうの日だ。だが、拉致事件を知ってからは被害者に思いをはせる日にもなっている。そうすることが風化させない唯一の方法なのだ。「修ちゃんカエル、必ず帰る」被害者家族の願いが叶うよう、拉致問題を若い人たちにも知ってもらい風化させないために、僕にできる行動を続けていきたい。

入賞者のコメント

拉致問題は、現在進行形の重要課題であり、風化につながってはなりません。だからこそ、多くの人が関心を持ち、心を寄せてほしいです。

優秀賞

「ただいま。」を聞くその日まで

鹿児島県立川内高等学校 一年

羽島 奈穂 はしま なほ

「力を貸してください。お願いします。」
真夏の青空にその言葉は響いていた。

私は昨年夏から拉致被害者家族の市川健一さんご夫妻と共に、弟の修一さんはじめ北朝鮮による日本人拉致問題について取り組んでいる。昨年は修一さんとの思い出を伺い、同世代に拉致問題について関心を持ってもらおうと活動に励んだ。高校生となったこの夏、放送部の親友が私に拉致問題への取組について取材したいと声をかけてくれた。拉致問題に取り組む仲間が出来たことが嬉しかった。

八月九日、拉致現場の吹上浜近くでご夫妻と道ゆく車に情報提供を呼びかけた。修一さんと増元のみ子さんの写真が載るチラシを渡す。初めての街頭活動に緊張した。

「ご協力よろしくお願いします。」
皆さんは分かってくれるだろうか、不安の中勇気を出して声をかけた。すると、

「頑張ってください。応援しています。」
と、温かい言葉を返して頂いた。

「修一が拉致されて四六年です。どうか拉致問題を忘れないでください。一緒に助け出してください。よろしくお願いします。」

と、何度も頭を下げ呼びかけるご夫妻の姿は、弟への思いと問題解決への決意が溢れていた。

そして、拉致現場の吹上浜に行った。砂浜から望む東シナ海は、昨年視察した横田めぐみさん拉致現場の波高い日本海とは対照的に、

「本当にここぞ?」と思うほど穏やかだった。

二日後、市川さん宅へ再びお伺いし、修一さんが初給料で母様のトミさんに贈られた「大島紬」を見せて頂いた。お母様は「修一が帰って来たらこれを着て出迎える」と言われていたが、袖を通すこと無く亡くなった。

「毎年干すけれど親の有難みを感じるよね。」

と涙ながらに語る妻龍子さん。そしてお母様が修一さんの誕生日に綴られた「文字」文字に愛情のこもった手紙、タバコ、レコード、凶鑑など修一さん愛用の品々。全て四六年前のあの日から時が止まったままだ。私も涙を堪えることが出来なかった。「私に出来ることを全力でやるしかない、もっと同世代の仲間を集めなきゃ。」と改めて決意した。

ご夫妻は最後に語られた、

「拉致から四六年も救い出せない。こんな日本でいいのか。一国民として、一刻も早い拉致被害者の全員救出に何が出来るだろうか、と自分事として考えて欲しい。若い皆には親の有難さを感じながら、もし自分の家族が…と想像してほしい。」

と。拉致問題は過去の出来事ではない。現在進行形で大切な人を持ち続ける家族がいる。関心を持ち応援することに年齢は関係ない。国と国の難しい問題だからと遠ざけず、正しい情報と拉致被害の現実が沢山のの人に伝わって欲しい。拉致被害者全員の「ただいま。」の声を聞くその日まで私も諦めない。

入賞者のコメント

拉致問題を知らない私達に出来ることは何かを考え、更なる若者世代への関心喚起と共に活動する仲間が増えるよう、引き続き啓発に努めたいと思います。

優秀賞

一緒に考え続けること

清風南海中学校・高等学校 一年

珠久 玲於奈 しゆく れおな

拉致被害者御家族のビデオメッセージを、初めて見た。けれど、途中からとても悲しくて、辛くて見ていられないほどの気持ちになり、胸が締め付けられた。こんなことがあつていいのか…こんなことが許されているのか…。絶対にダメだ。やがて、怒りの感情が湧いてきた。

拉致問題は、平穩に暮らしていた人々の生活を突然、奪い、多くの人々の当たり前の幸福が理不尽に失われた事件だ。僕が生まれるずっと前に発生し、現在に至るまで解決されていない。解決するためにはどうしたらいいのかを、真剣に考える必要があると思った。

御家族のビデオメッセージでは、子どもや親、姉弟を思う優しい言葉であふれていた。被害に遭った御本人だけでなく、御家族も周囲もみんな苦しいはずなのに、自分達の苦労やしんどさは二の次で、しっかりと前を向いて話されるお姿に、御家族の強さと深い愛情を感じた。ただひと目でもいいから会いたい。声が聞きたい。どう過ごしているのかだけでも知りたいという切なる願いが、ひしひしと伝わってきた。そして、それは決して他人事ではないということをもメッセージを見て感じた。

政府はこれまで、北朝鮮に対して、機会あるごとに拉致問題を提起している。最初は否定していた北朝鮮も拉致を認め、謝罪し

ている。そして、五人の拉致被害者が二十四年ぶりに帰国した。その後も、あらゆる手段を使い拉致被害者救済のために全力で取り組んでいる。しかし、今もなお、北朝鮮にいる被害者の情報は少なく、安否もわからないままの状態が続いている。

僕たちにできることは、拉致問題に関心を持ち、たくさん若い人たちにもこの現実を知らせることだ。国と国との問題である前に、一人の人の尊い人権が侵害された重大な事件であるという認識が必要だ。これは、どの国の人々にとっても許されないうことだ。この作文を書くまで知らなかったことがたくさんあった。ブルーリボンバッジやその意味についても、調べてみた。ブルーリボンバッジは、拉致問題の解決を願う気持ちを込めたバッジ。その青色は、被害者の祖国日本と北朝鮮を隔てる「日本の海」を、また、被害者と御家族を唯一、結んでいる「青い空」をイメージしている。全ての被害者が、青い空の下で御家族と、元気に再会する日がくることを願って、拉致問題について考えていくことが、僕たちができる初めの二歩なのだ。

入賞者のコメント

新聞で、拉致問題を知りました。事件を正しく知り、考え続けること。全ての被害者、御家族の心に、少しでも寄り添いたいと思いききました。

特別賞

拉致被害者の声を忘れないために

成立学園高等学校 二年

川合 咲綺 かわい さき

平穏な日常が一瞬にして奪われる、というのはまさにこのようなことを指すのだろうか。アニメ「めぐみ」を観て、私はそう感じた。

拉致問題には、テレビのニュースくらいでしか触れたことがなかった。横田めぐみさんをはじめとする若者が北朝鮮に拉致され、今も親族の方々が帰還を求め活動している。そのような最低限のことしか知らなかった。しかしこれは、多くの日本国民に伝えることではないだろうか。アニメ「めぐみ」内で、横田滋さんたちが街頭で訴えるシーンは強く印象に残っている。滋さんと、妻の早紀江さんは必死に演説を行い、ビラも配っていた。だが道ゆく通行人はほとんど耳を傾けていない様子だった。それどころか、手を跳ね除け、落ちてしまったビラの上を平気で歩いていく人もいた。行動どおり滋さんたちの思いを踏みにじったのだ。この問題の深刻さを知っていれば、少しでも拉致被害者やその家族の方々の気持ちに理解があれば、どうして同じことができようか。このような日本人の拉致問題への関心の低さが、一つの大きな課題である。

視点を変えて、国としての活動にも注目して調べてみた。まず、国内に向けたものとして、パンフレットやポスターの制作、掲示が行われている。特にポスターは学校内にも掲示されているためよく知っていた。だが、私が最も興味を持ったのは、拉致被害者御家族のものをはじめとするビデオメッセージだ。このような被害者御家族

の気持ちに真に触れることができるものは、心情を理解する上でも、関心を持たせる上でも重要ではないだろうか。私は、このような情報をより発信してもらいたいと感じた。

そして、北朝鮮へ対しては「ストックホルム合意」が日本からの制裁措置強化を理由に一方的に打ち切られて以降、目立った進展はないままだ。しかし、本当に解決のために必要なのは「制裁措置」ではなく、「対話・歩み寄り」ではないだろうか。もちろんそれは難しく、時に危険なことだ。だが思い出してほしい。滋さんたち御家族は、相手国を強く非難することなく、いつも冷静だった。私たちも先入観を捨て、真っ直ぐに向き合う姿勢をとることが大事なのではないかと考えた。

突然日常が奪われる、その苦しみや辛さを完全に理解することはできない。しかしその気持ちに寄り添うことはできる。被害者御家族の高齢化が進む今、私たちが積極的に関心を持つていく必要がある。

入賞者のコメント

今まで拉致は「国家間」の「遠い」感覚だった。しかし作文を通じて「人間同士」の「近しい」感覚に変わった。解決に向けての方策を考えていきたい。

特別賞

知ること、知らせること

セントヨゼフ女子学園高等学校 一年

にしお
りりか
西尾 俐々圭

今日は何をしたのだろう。朝、目覚ましと共に起き、眠たいながらも朝ごはんを食べ、友達と学校に行く。そんな日常は私たちがあまり意識をしないだけで、実はものすごく幸せな日々を生きているのである。私自身がそのように実感したのは「めぐみ」を見てからだ。

私はめぐみさんと両親の最後の会話に胸が締め付けられた。「いつてらっしゃい。気をつけてね。」このような会話は私自身も毎日交わっている。こんな毎日がたった一日の出来事で失われるのは、どれだけ悲しいことだろう。言葉だけでは想像し難いが、めぐみさんの両親は大きな喪失感を抱いたに違いない。私が両親を突然失ったとしたら同じような感情を抱くと思うからだ。

こんなやるせない、心痛い事件に対し私たちができることはあるだろうか。私が考えたのは、『知らせる』ことである。私は正直、日本人拉致問題についてあまり知らなかった。テレビで報道されていたらしいが、テレビをあまり見ない私にとって、時間のたった事件については遠い存在であるのは事実だ。そこで私は学校で学ぶ機会を設けるのが効果的だと考えた。集会や道徳の授業、ホームルームなどで映像を用いる。少し耳に入るだけでも、それが未来の行動につながる可能性は大いにある。将来世を担う子どもたちが、少しでもこの事件について知識を得ることは大きな意味があると考ええる。

また、SNSを利用した情報発信も一つだ。近代のSNSは現在

進行形で進化し続けている。おすすめ欄なども私たち一人ひとりに対応するようにして表示される。そのような機能を大幅に活用してはどうだろうか。年齢に合わせた記事や文面が表示されることで、事件について幅広く浸透させることが可能となる。そして拉致問題解決への活動に、若者を含めた大勢の人が参画できるようになる。「めぐみ」にあったような署名活動も、少しの知識を持つただで関心を持って、活動に参加することだってできるだろう。このようなことが『知らせる』ことのいちばんの利点ではないだろうか。

日本人拉致問題を知ることには新たな意識が芽生えた。それは、毎日世界の状態を知ることだ。私はこの拉致問題を、授業で初めて知ったことに危機感を覚えた。もし、前々から知っていれば。そう悔やんでも過去は変えられない。だからこそ日々の情報収集を怠らず、小さな一歩でも政治に踏み出せればと思う。これからの未来に幸せが溢れるよう願って。

入賞者のコメント

現在使用できる技術を最大限に活かすことができ、私たちの使命だと感じました。読者の方のSNSの視野が広がってこそ、私の文の意義を成すと思います。

特別賞

『北朝鮮拉致問題解決に向けて』

玉川聖学院 三年

生徒

私は『北朝鮮拉致問題の解決、膠着を破る鍵とは何か』という本を手にとるまで北朝鮮が日本人に対して行ってきた暴力的で悲惨な拉致問題について認識していなかった。北朝鮮が初めて日本人を拉致してから四十七年という年月が経とうとしている。応募のきっかけは友達や親世代に拉致問題を語れる人がいないこと。また、半世紀前に起こった問題が解決に至っておらず、このままでは拉致問題が日本と北朝鮮の「歴史」になってしまうのではないかと危機感を覚えたこと。そして、十八歳という年齢になり選挙権を持つようになったことがきっかけで日本の政治に興味を持ち、北朝鮮拉致問題について考えるようになった。

そもそも拉致問題とは、一九七〇年代から一九八〇年代に起き、日本や欧州から合計十七人の日本人が北朝鮮の工作員によって北朝鮮に拉致された問題である。北朝鮮は二〇〇二年に行われた日朝首脳会談で日本人を拉致したことを認め、謝罪した。北朝鮮は十三人拉致、五人生存、八人死亡と通告した。しかし、死亡と認めるための証拠が不十分であるとして、日本は死亡したとされる人を含めた被害者の全員帰国を北朝鮮に求めている。

本書の中で安明進氏が横田めぐみさんと会ったとされる元工作員の発言を横田めぐみさんの母親である横田早紀江さんに伝えるところが特に印象に残った。その内容は「船内で四十時間お母さん助けて、

助けてと泣きわめき、出入り口や壁を引掻いたために爪が剥がれそうになった」という描写だ。突然見知らぬ大人に拉致され、家族と引き離された当時十三歳のめぐみさんの立場になって考えてみると、拉致という行為がいかに残酷で胸が張り裂けるような行為かが容易に想像できる。このような残酷な問題を二度と起こさないために、十代の私には何ができるだろうか。それは同世代に拉致問題を認知してもらうことからではないかと考えた。同じ日本人が拉致され、いまだ全員帰国の願いが叶っていないことを伝えることで拉致問題が歴史上の出来事ではなく現在も続いている問題だと認識してもらえよう。しかし、個人で拉致問題を認識してもらうために行動するのは限界がある。私が望むことは、政府が北朝鮮との対話を通して拉致被害者の即時帰国を求めて求めることにあると考える。拉致被害者が高齢になっていること。また、年月が経つにつれて、亡くなったとされる方の証拠は見つけにくいこと。これらは政府が二〇一四年から拉致問題解決のために行動しなかつた結果だと考えざるを得ない。拉致問題を悲劇のまま終わらせないためにも、日本が北朝鮮と対話しなければ解決の道はないと考える。私は北朝鮮人権侵害問題啓発週間を通して、拉致被害者の身に起きた事実と意思を受け取るとともに、日本政府に対して拉致被害者の即時帰国を叶えるために必ず行動にうつすことを約束してほしい。

入賞者のコメント

この作文では、自分に出来ることと政府がするべきことに焦点を当てました。拉致問題の解決に向けて自分ができることを忘れずに生きていきたいです。

英語エッセイ中学生部門
英語エッセイ高校生部門

最
優
秀
賞

Abduction is a global issue

TAKATA Masakazu

9th grade, Maizuru City Kasa Junior High School

We cannot just “know” about the abduction issue. If Megumi and her family had not been abducted, they would still be living an ordinary, happy life. Such a daily life was interrupted by the abduction.

In August, I participated in the “Junior High School Summit on the Abduction Issue.” There, I listened to a lecture by Takuya Yokota, the younger brother of Megumi Yokota, a victim of abduction.

The abduction refers to the incident about fifty years ago when North Korea abducted young Japanese citizens to train their agents. Although North Korea admitted the fact, only 5 out of 17 abductees have returned. Even after half a century, the abduction issue remains unresolved.

What we can do to solve the abduction issue is to first watch the anime “Megumi.” At the summit, Mr. Yokota emphasized the importance of thinking about it as a personal matter. It is crucial to watch it with the mindset of “What if my beloved family or friends were suddenly taken away?” After the summit, I watched “Megumi” again. It looked completely different. The first time I watched it was when I was 7th grade. At that time, I watched it as a bystander. Now, I can feel the pain and suffering of the family. I understood the meaning of “as a personal matter” that Mr. Yokota mentioned, and I became able to assert it in my own words.

According to a public opinion survey, the percentage of people interested in the abduction issue is 73.6%. As the awareness of the issue fades over time, it is necessary to spread the abduction issue. The internet and social media are used by a wide range of age groups, from young people to the elderly. By utilizing information and communication technology, it is possible to disseminate information widely.

The families of the abductees are aging, and Megumi’s father, Shigeru, passed away in 2020 without meeting his beloved daughter. Therefore, the abduction issue is a race against time.

Conflicts continue around the world today, such as the invasion of Ukraine and the conflict in Palestine. It is common to see reports of conflicts when you turn on the TV. However, we must not forget about the abduction issue. It has been a silent battle for much longer than wars.

From Mr. Yokota’s lecture, the desire of the abductees to “return to Japan as soon as possible” touched strongly in my heart. The abduction issue is not the past, and Megumi and others are still waiting for help with the single-minded desire to “meet their families.”

Therefore, I believe that raising our voices in cooperation with the world for the early return of the abductees will be the driving force for their rescue. As a participant in the summit, I felt a mission to disseminate the abduction issue. It is necessary to widely disseminate the current situation of the abduction issue and what we can do. I want to actively participate in future activities for the early return of the abductees.

入賞者のコメント

夏に横田さんの講演を聞き、拉致問題を「自分事として考えなければならない」と思いました。一人の国民として、できることを行動に移していきたい。

拉致は世界の問題

和 訳

舞鶴市立加佐中学校 3年

たかた まさかず
高田 昌和

拉致問題は「知っている」だけで済ませてはいけない。めぐみさんもそのご家族も拉致がなければ今もごく普通の円満な日常を過ごしていただろう。そんな日常が拉致によって遮られた。

私は8月、「拉致問題に関する中学生サミット」に参加した。そこでは拉致被害者の横田めぐみさんの弟、横田拓也さんの講義を聞くことができた。

拉致とは今から約50年前に北朝鮮が工作員の育成のため、日本の若者を連れ去った出来事だ。北朝鮮は事実を認めたものの、帰還者は17名のうち5名。半世紀経った今も、拉致問題は解決していない。

拉致問題の解決に私たちにできることはまず、アニメ「めぐみ」を観ることだ。拓也さんはサミットで「私事として考えること」を強調された。「自分の大切な家族・友人が突然連れ去られたらどうする。」という執着心をもって観ることが重要だ。私はサミットの後、もう一度「めぐみ」を観た。全く違う見え方がした。私が最初に観たのは中学1年生の時だ。当時は傍観者のように眺めていたと思う。今は家族の辛さや苦しさが伝わってくる。拓也さんのいう「私事として」の意味が理解でき、自分の言葉で主張できるようになった。

世論調査の結果、拉致問題に対して関心のある人の割合は73.6%だという。時間とともに問題意識が薄らいでいる中、拉致問題を広める必要がある。インターネットやSNSは若者から高齢者まで幅広い年齢層で利用されている。情報通信技術を利用すれば、広く発信することだってできる。

拉致被害者のご家族は高齢化が進み、めぐみさんの父、滋さんは2020年に愛娘に会えぬまま亡くなられた。だから拉致問題は時間との勝負だ。

ウクライナ侵攻やパレスチナの紛争など世界では今日も争いは絶えない。テレビをつけたら争いの報道が流れるのが日常だ。しかし、拉致問題のことも忘れてはいけない。拉致問題は戦争よりもずっと長い期間、沈黙の戦いが続いている。

拓也さんの講義からは拉致被害者の「早く日本に帰りたい」という思いが自分の心に強く響いた。拉致問題は決して昔の出来事ではなく、めぐみさんたちは「家族に会いたい」という一心で今も助けを待っている。

だから拉致被害者の一刻も早い帰国に向けて、世界が協力して声を上げることが救出の原動力になると思う。私はサミットに参加したものとして、拉致問題を発信していく使命があると思った。拉致問題の現状や、自分たちにできることを広く世界に発信する必要がある。一刻も早い拉致被害者の帰還に向けて、今後の活動に積極的に参加していきたい。

優
秀
賞

A first step to solve the abduction issue

GU Zui

8th grade, Itano Junior High School

I can't forgive the abduction by North Korea. If I were a member of the family of Yokota Megumi, I would feel desperate every day of my life. The family lost her, their beloved daughter, unreasonably by the way of "abduction" and they've never known about her since then. But, they have never given up and have taken many actions to get her back.

I didn't know anything about the abduction issue before. I became a participant of JHS summit this year, so I learned about it. I could understand the fact and severity of it. How about other junior high school students? When they hear about the abduction issue, what will they think? I think they will not be interested, and say "I see ... and what?" Probably they don't know about it, and may think it doesn't matter to them.

I think it's a big problem that there are many people who don't know about the abduction issue or think it doesn't matter to them. We should solve this problem first. So, I think it's most important to change people's mind, from "I don't know about it" to "I have heard of it."

To do that, the most effective way is using internet or SNS to send and receive the information about the abduction issue. Recently, smartphones are everywhere, and almost all of my classmates possess them. When we send more messages about the abduction issue using the internet, then more people that we don't know can receive and understand the issue. It's easier to use SNS compared to talking to each person, isn't it? However, sending messages using the internet or SNS may cause insults or misunderstandings. But nevertheless, if we debate about the issues, many people may watch the debates. That will increase the number of people who know the issue. Debating about it will deepen our interests in it. Moreover, we should send this message that "the abduction issue is our own affair." I think this idea is especially important.

Someone may think, "Can we solve the issue in such a way?" The answer is maybe "No" but it's enough for us, junior high school students. I read the brochure about the abduction issue published by the government. One question is: What can we Japanese people do to solve the abduction issue? The answer I found is, "When each Japanese person expresses strong determination that we will never forgive abductions and we will definitely get all the abductees back as soon as possible, it will be a strong support to solve this issue."

The abduction happened in the past, but it is the ongoing problem, and hasn't been resolved yet. I think using internet or SNS is the most effective way to inform the younger generation like us about the issue. We can even convey this information beyond the border. So, I want people all over the world to know the issue, not only Japanese. I'm glad if my idea contributes to resolving the abduction issue.

入賞者のコメント

拉致が自分の街で起こる可能性は0ではありません。だから、拉致問題を自分のこととして認識することが、問題解決への第一歩ではないでしょうか。

拉致問題解決への第一歩

和 訳

板野町板野中学校 2年

顧 梓 訳

北朝鮮による拉致は許せない。もし私が横田めぐみさんのご家族だったら、そんな状況に絶望せずにはいられないだろう。横田めぐみさんのご家族は、最愛の娘を「拉致」という理不尽な方法で失い、それ以来、めぐみさんの消息を知ることはなかった。しかし、彼らは決してあきらめず、彼女を取り戻すために様々な行動を起こしている。

私はそれまで拉致問題について何も知らなかった。今年、中学生サミットに参加することになり、そのことを学んだ。拉致問題について、その実態と深刻さを知った。他の中学生はどうだろうか？拉致問題を聞いてどう思うのか？興味を持たず、「ふーん、それで？」となると思う。恐らく知らないだろうし、自分には関係ないと思うかもしれない。

拉致問題を知らない人、自分には関係ないと思っている人が多いことが大きな問題だと思う。まずはその問題を解決すべきだと考える。だから、「知らない」から「聞いたことがある」に変えていくことが一番大事だと思う。

そのためには、インターネットやSNSを使って、拉致問題に関する情報を発信したり、受け取ったりすることが一番効果的だと思う。最近ではスマートフォンが普及し、私の同級生もほとんどスマートフォンを持っている。インターネットを使って拉致問題を発信することで、より多くの、会ったことのない人にも拉致問題を知ってもらうことができる。一人ひとりに話すよりも簡単な方法ではないだろうか。しかし、インターネットやSNSを使ってメッセージを送ると、反論されることもある。でも、みんなで議論すれば、それを多くの人が見てくれる。そうすれば、その問題を知る人が増える。議論することで関心も深まる。そして、「拉致問題は自分たちの問題だ」というメッセージを発信する。この考え方は特に重要だと思う。

「そんな方法で問題を解決できるのだろうか？」と思う人がいるかもしれない。答えは「ノー」かもしれないが、私たち中学生にはそれで十分だ。日本政府が発行した拉致問題に関する広報誌を読んだ。その中で、「拉致問題を解決するために、私たち日本人は何ができるのか」という問いに対して、「日本人一人ひとりが、拉致を絶対に許さない、拉致被害者を必ず一刻も早く取り戻すという強い決意を表明することが、拉致問題解決の力強い支えになるはずですよ」と答えている。

拉致は過去にあったことだが、現在進行形の問題で、まだ解決していない。私たちのような若い世代にこの問題を伝えるには、インターネットやSNSを使うのが一番効果的だと思う。それを使って国境を越えて情報を伝えることができる。だから、日本人だけでなく、世界中の人にこの問題を知ってもらいたい。私の考えが拉致問題の解決に少しでも貢献できればうれしい。

最
優
秀
賞

Passing The Baton

MORIE Sakura

11th Grade, Ehime Prefectural Saijo High School

What would you do if your child suddenly disappeared and never returned? In 1977, this tragedy actually happened when 13-year-old Megumi Yokota was abducted by North Korean agents. The story of the Yokota family is a symbol of the abduction issue perpetrated by North Korea and represents the painful reality Japan continues to face. Despite ongoing efforts, this severe violation of human rights remains unresolved. As future leaders, we young people have a responsibility to understand this issue in depth and raise awareness globally. We must take the baton in this struggle for justice and continue to run forward.

I first learned about the North Korean abductions when I was in elementary school. At the time, I was completely unaware of the abduction issue and only truly understood the facts after recently watching the anime “MEGUMI” in my civics class. Upon watching the movie, I was deeply moved to learn that, although many decades passed, Megumi’s family never lost hope to be reunited with her and still pursue the issue in search of the truth. Inspired by their tireless efforts, I too want to bring greater attention to the abduction issue.

According to the Cabinet Office’s 2023 survey, 73.6% of respondents were concerned about the abduction issue, down more than 10% from 86.4% in 2013. However, what shocked me most was that among respondents aged 18-29 only 64.1% were concerned. As the families of those abducted grow older, it becomes even more critical that we don’t forget the feelings of the abductees. At my school’s culture festival in November, I’m planning to create original flyers to raise awareness of the abductions and distribute them to students, teachers, parents and my wider community. By creating opportunities for everyone to gain awareness, we can achieve the earliest possible return of all abductees.

In addition, it’s vital to remember this is a global issue that requires international cooperation to resolve. Abductions by North Korea have been made not only in Japan, but also in many other countries including China, Thailand, and France. Therefore, I must take advantage of my English ability to actively participate in many intercultural events and volunteer activities where I can interact with foreigners and exchange opinions on this issue. By listening to international perspectives, we can collectively deepen our understanding of the issue.

In conclusion, I strongly believe the abduction issue must be resolved from the perspective that it’s not simply someone else’s story, but a universal issue every citizen should be concerned with. By again watching the animation MEGUMI, I was able to feel even closer to the feelings of the abductees and renew my interest in the issue with even greater strength. Moving forward, I will take the baton in this struggle for justice by creating opportunities for people, regardless of nationality, to become interested in the issue. By taking positive action myself, I hope to become a bridge to the future that will fulfill the lifelong wishes of the abductees and their families.

入賞者のコメント

拉致問題に対して抱いた感情や今後していきたいことを意識して書きました。作文に込めた思いが多くの人に伝わって関心を持つ人が増えたら嬉しいです。

バトンをつなぐ

和訳

愛媛県立西条高等学校 二年

もりえ さくら
守江 咲良

あなたのお子さんが突然消えてしまい、二度と戻らなかつたらあなたはどうしますか。1977年にこのような悲劇が実際に起きました。13歳の横田めぐみさんが北朝鮮の職員によって拉致されたのです。横田家の物語は、北朝鮮が犯した拉致問題の象徴であり、日本が今でも直面している痛ましい現実を表しています。(解決に向けての)努力は今でも続いています、この苛酷な人権侵害は未解決のままです。未来を担う私たち若者にはこの問題を深く理解し、世界中の人々の意識を高める責任があります。そして、この正義のための戦いのバトンを受け取り、未来に向かって走り続け、次の世代へ届けなくてはなりません。

北朝鮮の拉致問題について私が初めて知ったのは、小学生のときでした。当時の私はこの問題について全く分かっておらず、真相を本当に理解し始めたのは、最近受けた公共の授業の中でアニメ『めぐみ』を観てからでした。このアニメを観て深い衝撃を受けました。何十年もの苦痛にもかかわらず、めぐみさんのご家族は彼女と再会するという願いを決して諦めず、今でも真相を求めてこの問題を追いつけていると知ったからです。ご家族のためまぬ努力に感化され、私も、これまで以上に拉致問題に関心を持たなければならぬと思いました。

内閣府の2023年の調査によると、回答者の73.6%が拉致問題に関心があるとのことですが、これは2013年の86.4%から10%以上も減っていることとなります。そして私にとって一番ショックだったのは、18~29歳の回答者の中ではたった64.1%しか関心がないということです。その数値は拉致被害者のご家族の方々の高齢化が進む中、私たちが拉致被害者の気持ちを心に刻むということが、ますます重要であることを示しています。11月に行われるわが校の文化祭では、拉致問題の意識を高めるための独自のチラシを作って生徒や先生方、父兄の皆さん、そして私の住む地域全般に配ろうと思っています。全ての人がこの問題を意識する機会をつくることで、拉致被害者全員の可能な限り早い帰還につながるのです。

加えてこの問題は、地球規模の問題であり、解決のために国際的な協力が必要となることを覚えておくことがとても重要です。北朝鮮による拉致は日本だけではなく、中国、タイ、フランスなどの各国でも起きているのです。だから、私は自分の英語力を伸ばして数多くの国際イベントやボランティア活動に積極的に参加し、外国人との交流を通してこの問題に関する意見交換をするのが私にできることだと思っています。さまざまな国の人の意見に耳を傾けることで、私たちが歩みをそろえてこの問題に対する理解を深めることができます。

結論として、拉致問題は決して他人事という考え方ではなく、国民一人ひとりが関心を持つべき普遍的な問題であるという考え方に変えるべきだと確信しています。私は、アニメ『めぐみ』を再び観ることで、拉致被害者の心情にいっそう寄り添うことができ、この問題に対する興味をさらに強くしました。今後は、国籍を問わず人々がこの問題に関心を持てる機会をつくることで、正義のための戦いのバトンをつないでいきます。自分自身が積極的な行動をとることで、拉致被害者とそのご家族の一生の願いが叶う未来に向けての架け橋になりたいです。

優
秀
賞

Silent Victims

FUCHIWAKI Uta

11th Grade, Kagoshima Joho High School

Imagine a family member telling you they are going to the beach to watch the sunset, but they never return.

This happened to Shuichi Ichikawa and Rumiko Masumoto in 1978 in my hometown Kagoshima when they were abducted by North Korean agents. Not only were their lives changed, but also the lives of their families, friends and relatives. Since then, their families have been campaigning, collecting signatures and appealing to the government to get them home. However, sadly, in 2002, the North Korean government admitted and apologized for abducting Japanese citizens. They confirmed that eight of the victims including Shuichi and Rumiko had already passed away. Despite hearing this shocking news and the lack of North Korea's transparency, the families still believe their loved ones are alive and continue to fight for the truth or bring them home.

I actually had the chance to talk with Mr. Ichikawa, the brother of Shuichi Ichikawa. He has gone through innumerable tough times, but the situation hasn't really changed. When I talked to my classmates about the abduction issue, many of them weren't even aware of this problem and that's when I realized that this could be because of the younger generation, and our lack of understanding, cooperation and help. I feel even more strongly about this issue now because I am the younger generation. I feel compelled to stand up more for this cause and take action to make sure Mr. Ichikawa will suffer less. I am taking this opportunity to share with you two solutions.

First, my generation seems to be unaware about these abductions. Mr. Ichikawa told me that he is afraid of the abduction issues fading away. He also mentioned that, currently the youth are not interested in petitions and ignore flyers. Ignorance is a major concern and must be acknowledged as one of the biggest problems. So, we must continue to debate, discuss and deepen our understanding among the younger generations. I am sure that Mr. Ichikawa would be pleased if we are more willing to work on this issue.

Second, Mr. Ichikawa said that he desperately wants to hold a summit with North Korea to directly discuss and negotiate, aiming to change the situation and reach the truth. But to make this happen, all generations must cooperate with the signature campaign. If people have a strong will, diplomacy will spread, Mr. Ichikawa said.

Mr. Ichikawa's mother passed away without seeing her son and could never wear the kimono Shuichi gave to her. Mr. Ichikawa said when it is Shuichi's birthday the family can't talk about him and keeps silent. While their voices are silent, their house is filled with frog memorabilia from supporters around Japan. So, he always remains in their hearts as the meaning of frog in Japanese is to return.

The least we can do is sign a petition, keep negotiations open and finally keep engaging the youth to give the silent victims a voice. Please, let us help keep Mr. Ichikawa's will alive.

入賞者のコメント

英語エッセイだからこそ、世界中の人に届ける力があります。市川さんご夫婦が、修一さんと再会できることを心から願っています。

沈黙する被害者

和 訳

鹿児島情報高等学校 二年

ふちわき うた

渕脇 詩

家族の誰かが夕陽を見に浜辺に行ってくると言ったきり、戻ってこないことを想像してみてください。

私の故郷である鹿児島で1978年に起きた事件です。この時、市川修一さんと増元るみ子さんは北朝鮮の工作員に拉致されたのです。人生が変わったのは彼ら二人だけではありません。二人の家族、友だちや親せきの人生も変わってしまったのです。それ以来、彼らの家族は、二人を取り戻すべく署名を集め、政府に訴えるなどして活動してきました。しかしながら悲しいことに、2002年に北朝鮮政府は日本人を拉致したことを認め、謝罪しました。北朝鮮は修一さん、るみ子さんを含む8人が亡くなったことを確認しました。この衝撃的なニュースや北朝鮮の透明性の欠如を耳にしてもなお、被害者家族は、愛する人たちが生きていることを信じて、真実を求めて、つまり彼らを取り戻そうと戦い続けています。

実は私は、市川修一さんのお兄さんとお話する機会を持ってました。市川さんは数知れぬつらい時を過ごしましたが、状況は大して変わっていません。クラスメートに拉致問題のことを話しましたが、その多くはこの問題を知ってさえいませんでした。その時になって初めて、これは若い世代のせいであり、私たちの理解と協力、そして助けが不足しているせいだと気づきました。私自身が若い世代だからこそ、この問題についてより強い思いを持ちました。この問題に立ち向かうために立ち上がり、市川さんがこれ以上苦しむことのないよう行動を起こさなければという思いに駆られました。

解決策を提示したいと思います。第一に私の世代は、拉致のことをよく知らないようです。市川さんは拉致問題が風化するのがこわいと言いました。今の若者は署名運動に関心がなく、ビラも無視されてしまうとも言いました。知らないということは大きな不安材料であり、それが一番大きな問題だと認識しなくてはなりません。だから、私たち若い世代で意見を戦わせ、話し合うことを続け、理解を深めなければなりません。私たちがもっと意欲的にこの問題に働きかければ、市川さんもきっと喜んでくれると思います。

第二に市川さんは、状況を変えて真相に行き着くために、北朝鮮との首脳会談を開いて直接話し合い、交渉することを心の底から願っていると言いました。しかし、これを実現させるには、すべての世代が署名活動に協力しなければなりません。国民が強固な意志を持てば、外交が広まります、と市川さんは言いました。

市川さんのお母様は息子に会うことなく亡くなりました。修一さんが贈った着物に袖を通すこともできませんでした。市川さんによると、修一さんの誕生日には、家族は修一さんのことを語るができず、沈黙を守ったままだといいます。家族が沈黙を守る一方で、家は全国の支援者から送られてきたカエルの置物で一杯です。カエルは「帰る」につながるので、修一さんはいつでも彼らの心の中にいます。

私たちにせめてできることは、嘆願書に署名し、交渉を続け、最終的には若者たちに働きかけて、沈黙する被害者に「声」を与えることです。どうかお願いします。市川さんの意思を実現させるのに力を貸してください。

この作品集は令和6年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2024」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。

文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2024 入賞作品集

令和7年2月発行

【発行】政府拉致問題対策本部

〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1 TEL:03-3581-8898

<https://www.rachi.go.jp>



令和7年2月発行